

日本語要約

『資本論』における物象化・物化・疎外—マルクス唯物論の基本概念—

平子友長

報告者は、『資本論』およびその準備諸草稿においてマルクスが物象(Sache)とモノ(Ding)を経済学的カテゴリーとして区別していることを示しつつ、マルクスにおける「物象化 Versachlichung」と「物化 Verdinglichung」とを次のように区別した。物象化は人間と人間との社会的関係が物象と物象との社会的関係に転化することであり、これは社会的関係レベルにおける「人格の物象への転倒」である。物化は、物象と物象との社会的関係がモノとしての物象の「性質」に転倒すること（第2の転倒）であり、マルクスはこれに「社会的自然性質」という概念を与え、「社会的自然性質」の担い手としての物象を「モノ Ding」と規定した。モノにおいては社会的形態的規定がモノの自然的素材的規定と癒着することの結果として社会的形態的規定が消失する。物化は、物象からモノへの転倒である。マルクスの物象化論は、物象化と物化の2契機から構成される。

従来の研究において物化は、主として、物神崇拜、倒錯的意識の問題に還元されてきたが、マルクスの物化概念は、「資本の生産力」を基礎づける概念として重要な役割を果たしている。マルクスは「資本のもとへの労働の実質的包摂」という概念を導入し、資本が単に労働者の剰余労働を搾取する生産関係であるのみならず、資本に適合的な科学を創出し、それを体系的に生産過程に適用することによって生産過程に「継続的革命」をもたらすことを強調し、これを「資本に固有な生産力」と規定した。「資本の生産力」は、生産諸力と癒着した資本であり、現代の科学技術は物化した資本である。資本は物化した資本になることによって「自然と人間との物質代謝」に攪乱を引き起こす力をもつことができた。

報告者は、最後に、物象化・物化論と疎外論との関係を考察した。報告者は、まず、疎外概念が『資本論』およびその準備諸草稿において重要な役割を果たしている事実に着目し、疎外が登場する文脈を考察することによって、疎外概念が、物象化・物化論の枠組みを前提として、価値、貨幣、資本におけるモノの人間に対する支配と自立化を「労働者が自分の労働の客体的諸条件に対して疎遠な対象に対するように関係すること」として規定し直すところに疎外概念が成立することを証明した。疎外論は、物象化・物化論を労働主体および活動としての労働の側から定式化する理論である。報告者は、つぎに、初期における『経済学・哲学草稿』における疎外概念が使用される文脈を検討することによって、初期マルクスにおいても物象化・物化された社会的関係を前提として疎外概念が成り立っていることを文献的に解明することによって、「疎外された労働」は資本家による労働者の剰余労働の搾取として把握してはならないことを示した。